ヒロインはツンデレに飽きてしまったらしい

文月純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒロインはツンデレに飽きてしまったらしい

【Ｎコード】
Ｎ６６０４Ｌ

【作者名】
文月純

【あらすじ】
「ツンデレなヒロイン」が「主人公の俺」に返した言葉は、「物語」すら超えたものだった。
キャラクター的な観点からのメタフィクション。ツンデレに対するアンチテーゼ。そんなものを盛り込んだ…なんだこれ。
短編処女作です。

教室に入ると、彼女がうわの空で外を眺めていた。
放課後の教室は夕焼けの橙に染まっていて、意味もなくノスタルジアを感じさせる。
彼女がこの時間帯にいるのは珍しい。
教室の前にかかっている時計を見る。十二時半。壊れている。
ちょいと歩み寄る。
肘をついて憂鬱げに、校庭で走り回る運動部を眺めている、のか判然としないが、とにかくぼうっと外を眺めている。
「ようよう」
軽く声をかけてみる。
返事がない。
「もしもーし」
目の前で手を振ってみせる。
反応がない。
「ちょいと太ってお悩みなのかな〜」
野次を飛ばす。同時に身構える。
こういうことを言うと、間違いなく回し蹴りが飛んでく――
「ぬ」
どういうことだ。「ぬ」だと。いや、ひょっとすると「ん」だったのかもしれないが、今はどうでもよい。「ぬ」とはどういう意味だ。肯定なのか。否定しているのか。ひょっとすると「ぬるい」や「温水洋一」の略かもしれない。でも意味不明だ。
とりあえず、なにかおかしい。
「…なぁ、一体どうした」
未だにぼうっとしている彼女に尋ねる。さすがに心配になった、というより不可解かつ不快なこの状況から早く脱したい。
無音十数秒。

こちらの顔は見ずに、こう言った。

「飽きた。ツンデレ」

唐突に何を言い出すのだ。いきなり「飽きた」はないじゃないか。

いや、まだ「学校」なら分かる。学校が退屈なのはしょうがない。

「俺」でもギリギリ許せる。俺はそんなに長く付き合えるタイプの男ではないと自覚している。だが「ツンデレ」とはどういうことだ。何がどういう脈絡で「ツンデレ」に「飽きた」ということになるのだ。

「お前は何を言っているんだ」

「だからさ、飽きた。ツンデレキャラやってくの」

どうやら「ツンデレ」は彼女自身を指すらしい。

紹介が遅れた。「俺」は「主人公」で、「彼女」は「ツンデレのヒロイン」だ。そして俺たちは「ツンデレヒロインとのラブコメ」という、よくある物語の登場人物だ。

いや、そんなことはどうでもよい。よくないけど。

彼女の不可解を通り越した驚愕の発言の方は重要だ。少なくとも「主人公」の俺にとっては。

「だって面倒だもん。私ってさ、アンタのセリフに対していちいちツンデレな反応したり、蹴り入れたりするじゃない？」

そのせいで俺の全身にはあざが絶えない。

「あれさ、予め考えてやってるの。こういうことを言ったらこういうセリフを返す、こういうことしたらこういうことをやり返す、って感じで。なおかつツンデレっぽく反応しなきゃいけない。疲れるんだよね、いつでも返せるように身構えていけないから」

そう言いながら、にわかに机にかけてあった鞄の中に手を伸ばし、一冊のノートを取り出してきた。無造作に俺に突き出す。

表紙にはこう記されていた。

『ツンデレ反応集』
中を開く。びっしりと文字が詰められ、空いているスペースに絵のようなものが描かれている。
記されている文はセリフのようだ。箇条書きで丁寧にまとめられている。
一つはこういうもの。
「心配された時…『う、うるさいわね！　アンタに心配される筋合いなんてないわよ！』『うっさい！　そんなことより自分の心配でもしなさい！』」
その他にも五つぐらいセリフが書かれている。どれも、作中で俺が言われたことばかりだった。
さらに一つはこういうものだ。
「寝坊しているのを起こす時…『起きろー！　このネボスケがー！』」
そのセリフの下には赤で、
「最初の『お』は『うぉおおおおおお』と、若干大げさに。末尾の『が』も同様。以下の動作も付随」
文字の下には二人の棒人間が描かれている。
横になっている棒人間に、もう片方がかかと落としを食らわせるような動作。
今となっては懐かしい、１巻の冒頭シーンそのものだった。
「漫才のツッコミと同じ。反応速度と引き出しの数がものを言う」
俺に向けて語るというより、独り言に近い口調だ。
「もちろん全部オリジナルじゃない。ツンデレの先輩が出演した作品を見て、その様子を少しアレンジ、あるいは全部パクる。そうでもしなきゃ選択肢なんて増えない」
確かに彼女のレスポンスは典型的ではあったが、その分バリエーションが豊富で、つっこまれる側としては飽きなくてよかったものだったと思う。
しかし、

「でもやっぱ面倒。ネタ切れも近いし、バリエーションにも限度あるし。いくら考えてもつまんない。そしてツンデレもつまんない」
そのつっこむ当人が今、飽きてしまった。
「第一、ツンデレなんて古い。大昔の元アイドルが名前だけでテレビに出ているのと同じじゃない、今の人気」
唐突にひどいことを言う。今の発言でどれだけの人間を敵に回したことか。
「大昔って、具体的に誰あたり？」
「そうねー。松田聖子あたり」
この言葉で全国の松田聖子ファンがほぼ確実に敵と化した。一斉に襲われたら絶対生き残れない。
「…にしても」
今度は胸元に手を伸ばす。そこには、この学校の女子制服特有のでかい胸リボンがあしらわれている。脱線するが、他にも女子制服はパフスリーブだったりパステル色のカラーリングだったりと、結構派手かつ空想的なデザインだ。一方の男は地味なブレザーだが。
「これ」そのリボンをにぎると、
「邪魔」

勢いよく、ひきちぎった。

「こういうデザインもそうだけどさ」
宙に投げられた赤いリボンが、ふわりと床に落ちる。
「ツンデレだって、近い内に廃れると思う。いつまでも流行遅れのキャラなんてやってたら、その内食いっぱぐれるわ」
これには一理ある。マンネリ化は、俺達のような虚構の存在には最大の天敵だ。「つまらない」「前に見た」といって切り捨てられては、もはや為す術がない。そんな状況に陥った物語の行きつく先は「忘却」であり、俺達にとっては「死」も同然だ。
もちろんそんなことは御免だ。だが。

「そんなこと言って、これからどうするのさ」
「さぁね。お寺の仏像見て、温泉に浸かって、おいしいもの食べてからゆっくり考えるわ」
唐突に休暇をとると言いだした。本当にコイツの考えはいつも突拍子もない。そのあたりはいつもの彼女だ。いや、しかし。
「お前が休暇とったらこの物語どうなると思ってんだ。破綻するぞ、シナリオ破綻。話が成り立たなくなって、それこそ食いっぱぐれるどころか、俺たちの絶滅の危機だ」
飛行機のパイロットが操縦をやめたら、海の中へ真っ逆さまだ。
「えー？　あの子メインにすれば？　ほら、前の巻でアンタと一緒に体育倉庫に閉じ込められた」
いわゆるサブヒロインが一人いるのだが、なるほど、活発で素直で童顔でやや巨乳のあの子なら1巻分やっても俺は平気だ。むしろ一向に構わん。いやそうでなく。
「この物語の趣旨は知っているな？　『ツンデレとのラブコメ』だからな？　突然メインヒロインを普通の活発な女の子にしてみろ。従来の安定した消費者が消えるぞ」
「新規のファンが増える」
「そんな保障どこにもない」
そう、わがままを言って話の構造を変えたら最後、俺達の最期がやってくる。そうならないこともあり得るが、それは人気作品にかろうじて適用されるか否か。まだ3巻までしか発売されていないこの物語では自殺行為に等しい。
どんなに飽きても、俺達はストーリーを進めなければいけないのだ。それが「キャラクター」というものなのだから。
まあ、個人的なことを抜きにしても、編集さんや上の人が許しやしないのだが。
「…それもそうか」
どこか納得している顔だ。俺の説得は成功、ということなのだろう。よかった、よかった。

うん、と一つ頷くと、彼女は鞄を手に持ち、立ち上がって、
「目が覚めたわ。ありがと」
教室の出口へ歩み出す。どうやら帰宅するようだ。
せっかくだし、一緒に帰ることにしよう。
これからも、彼女との「ありふれたラブコメ」の物語は続いていくことだろう。それでよいのだ。現状に少し不満があっても、今を維持し、進むべき方向へ進むことが、一番幸せなのだから。
「あれ、ついてくるの？」
「ああ、俺も帰るよ」
「帰る？　何の話？　帰んないよ」
帰らないのか。すると、今日はどこか買い物にでも行くのか。
「どこ行くんだ？」
「坂崎さんとこ」
「坂崎？　誰ソイツ？」
「知らないの？『編集』の坂崎宏さん」
――限りなくいやな予感。
「な、何言って――」
「あの人のとこにいって、こう言ってくる」
引き戸を開けた彼女は、すがすがしい笑顔をこちらに向け、
「この物語のメインテーマは、『活発少女との甘々ラブストーリー』にして下さい、ってね」
悠々と、去って行った。

※　※　※

教室に、俺ひとり。
無理だったのか。彼女はそこまで馬鹿だったのか。
破綻したのか。今この瞬間、この物語はぶっ壊れてしまったのか。

無音。

何も、起こらない。
いけない。この状況は非常によろしくない。
読者はイベント無しの様子を延々と描写した文など、望んではいない。
何かしなくては。主人公が何かすれば、何か起こるだろう。
ふと、床を見る。
彼女が引きちぎった、真っ赤なリボン。
拾い上げてみる。そして、少し考えて、

頭の上にのせてみた。

何も起こらない。
前の時計を見る。
十二時半。やっぱり壊れたままだった。

（後書き）

・メタい物語が書きたい。そんな欲求がたまってできた産物。
・ツンデレもツンデレ以外のヒロインをやりたいんだよ。そんなことを考える私は多分にアンチツンデレ。
・処女作は色々と稚拙。指摘点がありましたら、遠慮なくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6604l/

ヒロインはツンデレに飽きてしまったらしい

2010年10月8日14時41分発行